
千夜一夜

佐月夏蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千夜一夜

【Nコード】

N2810Y

【作者名】

佐月夏蓮

【あらすじ】

教会を兼ねた孤児院で育てられた青年アベルは、今日も貴族嫌いのシスター・エルのせいで仕事をひとつ潰されてしまう。

吟遊詩人をやって生計を成り立っている彼にとって、貴族も裕福な金持ちも大事なお得意様だ。

しかし貴族嫌いのシスターのせいで、彼はよく仕事を潰される。

運命の岐路を迎えたこの日もそうだった。

運命の運び手の少女と出逢ったときも、彼は仕事を潰され時間を
持て余していたのだ。

深い意味のないような、どこにでも転がっている出逢い。

それが自分の運命を根底から変えてしまっても知らずに。

彼はひとつの出逢いを体験する。

その出逢いが次の出逢いを呼び、アベルの運命は急速に変わって
いくのだった。

この物語はブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

序章（前書き）

新しい物語の始まりです。

本当はもうすこし様子を見るつもりでしたが、ブログの方で問題が発生したので、新連載に踏み切りました。

「失われた恋人」時に消えた伝説」共々よろしくお願いします。

序章

今日も穏やかに夕陽が沈んでいく。

何事もなく日は過ぎて人々が家路につく頃、青年はじつと中空を眺めていた。

今日は久しぶりの貴族の邸宅でのパーティーにお呼ばれしていたのだ。

彼、アベルはそういう儲けられる機会は、なるべく逃さないようにしている。

ただでさえ裕福とは縁のない生活なのだ。

儲け時を誤ってはならない。

なのに。

口から深々とため息がもれる。

「エル姉に今日の仕事場が、貴族のパーティーだって知られたのが失敗だったな」

噴水の傍に腰かけたまま、だれにともなく愚痴る。

彼の姉代わりでもあるシスター・エルは大の貴族嫌いだ。

貴族と名のつくものなら、なんでもキライで、寄付金なども絶対に受け取らない。

相手が好意や善意で申し出ていても、だ。

おかげで生活はいつも火の車。

アベルが小さい頃に遊びで覚えた吟遊詩人の腕前がなかったら、果たして今頃生きていたかどうか怪しい。

とっても怪しい。

なにしろ教会は孤児院も兼ねているのに、エル姉は寄付金を受け取らないのだ。

貴族が名をあげるためとはいえ、善意を前面に申し出ていても。

そのためにアベルが小さい頃などは食べる物にも困る始末。

アベルが何気なく始めた吟遊詩人が大当たりしなかったら、きっと自分も子供たちも飢え死にしていた。

しかし吟遊詩人を名乗るからには、儲けるために貴族や裕福層は避けては通れない。

彼らこそ吟遊詩人に大金を投じてくれる相手だからだ。

選り好みしていたら、得られるお金も得られない。

しかしエル姉にはその論理も通じない。

とにかく「いやっ!!」の一点張りで通してしまっているので、アベルはなるべく自分の仕事先は知られないようにしている。

普段からとても気をつけていたのだ。

なのに今日に限って知られてしまった。

「忌々しい」

呟いてポケットからカードを取り出す。

今日のパーティーの招待状だ。

これがないと入れないとかで、パーティーで演奏するだけのアベルにも送られてきた。

それですべてがバレてしまった。

エル姉は恐ろしい勢いで怒り狂い、アベルを部屋に閉じ込めた。

パーティーに出られない時間帯になるまで。

おかげで解放された今、こうしてすることもなく、夕陽を眺めている状態だ。

貴族はここ最近の怪盗騒ぎのせいで、開場時間を過ぎると、招待状を持っていても会場には入れてくれない。

その時間はとっくに過ぎていて、つまり招待状があつて、パーティーには欠かせない吟遊詩人でも会場には入れないのだ。

「これでまたひとつ信頼を失ったなあ。もし悪い噂でも広がったら、俺、どうするんだ？」

さすがに心配だ。

今では孤児院を支えている生活費も教会の維持費も、捻り出しているのはアベルだというのに。

悪い噂が広がって仕事がなくなったら、とたんに生活は成り立たなくなってしまう。

「とりあえず……こんなところでブーツとしていてもしかたがないから帰るか。フィーリアも心配しているだろうし」

エル姉に閉じ込められた後で、さすがに怒って孤児院を飛び出してきたので、妹代わりのシスター見習いフィーリアが、とても心配そうに見送っていた。

それはわかっていたのだが、あのときはだれのせいで苦労していると思つているのかと思うと、どうしても我慢できなかったのだ。

立ち上がったとき、だれかにドンツとぶつかられた。

完全に不意をつかれたので上体が揺れる。

「あっ」

高い声が悲鳴のような声を出すのを聞きながら、アベルの身体はそのまま噴水の中に落ちていった。

序章（後書き）

第1章は毎日更新します。

第2章は1日置きに第3章からは土曜日の配信になります。

第1章 教会と孤児院（1）

「踏んだり蹴ったりだ。ついてない」

連れに聞こえないようにアベルは愚痴る。

噴水に突き落とされた後、アベルは啞然として相手をみたが、相手はそれは可愛い女の子だった。

長い金髪を背中中でひとつに括っていて、可愛いエプロンドレス姿。

一見して良家のお嬢さんといった風情だった。

アベルにぶつかって噴水に突き落としてしまったことでオロオロしていた。

さすがに怒るに怒れず、アベルは気にしなくていいと笑ったのだが、どういいうわけか相手の少女は気に病んで引かなかった。

いくら責任感が強い少女だったとしても、ちょっと異常なほどに

それでそれとなく探りを入れると、どうも少女は行くアテがないらしかった。

ここで出逢ったのが救いとばかりに、アベルになついてきた次第である。

呆れて突き放そうかと思ったが、その事情を聞いた瞬間、少女のお腹がなった。

少女は赤くなってお腹を何度も叩いていたが、これには怒る気も失せてしまった。

それで結局、孤児院まで連れていくことになっている。

まあ元々が身寄りのない人々の集まりのようなところだ。

ひとりやふたり増えたところで困る人はだれもない。

しかし相手のことをなにも知らない状態で連れていくのも変だ。

さりげなく振り返る。

少女は後ろをつついて歩きながら、物珍しそうにキョロキョロしている。

その様子からみて、絶対に行くアテがないなんて嘘だろ、と、アベルは内心で突っ込む。

おそらく帰る家はあるのだ。

あるのに帰る気がない。

もしくは帰れない。

そんなところだろうか。

どこかの裕福な家のお嬢さんが、親とケンカして家出でもしてきた。

そんなところかなとアベルは考える。

「きみ……名前はなんていうの？」

「名前……ですか？」

突然話しかけられた少女は、幾分、身構えた様子を見せた。

「そう。名前。呼ぶ名前がないと不便だし。あ。俺はアベル。アベルっていうんだ」

「アベルさ……んですか。素敵な名前ですね」

微笑んでそう言うってから、少女はすこし間をあけた。

「わたしはレティといいます」

答えてきた少女にアベルは一瞬だけ視線を向けたが、なにも言わず「そう」と答えた。

本名じゃないかと読み取りながらも。

「これから俺が帰る家は孤児院だから、ちょっと騒がしいかもしれないけど、あんまり気にしないで」

「孤児院？」

「身寄りのない者が集まって暮らしてるところだよ」

わからないかなと思って説明すると少女は赤くなる。

「そのくらいわかります。わたしにだって」

ブツブツと口の中で愚痴っている。

どうやら意味が通じたらしい。

「でも、それだとわたしが行ったら、ご迷惑ではないですか？」

「困ってる人を助けるのが教会の役目だから」

「教会？ さっきは孤児院って……」

「教会が孤児院を兼ねてるんだ。この辺だと珍しいらしいけど」

「たしかに珍しいですね。普通は孤児院と教会は別々だし」

そこまで言うてから、少女は首を傾げた。

「それだと生活はどうやって？ 教会への寄付金だけでは食べていけないのでは？」

「あー。うん。その辺は適当にね」

「適当……」

適当でなんとかなるのだろうかと、少女の声に出ている。

しかしそこまでの内情を明かす必要性を感じなかったので、アベルはなにも説明しなかった。

「とりあえず怒られる覚悟だけはした方がいいな」

「どうしてですか？ あ。それはわたしが怒られるのはわかりますけどっ」

「いや。数少ない余所行きの服を汚したから、姉代わりのシスターに責められるんだよ」

ここまで言ってアベルは肩を竦めてみせる。

「この服を買うのに、どれだけのお金が必要だったと思ってるってね。それにこの服は普通に洗濯できないし」

カードが届く前に出掛ける準備を整えていたので、アベルはパーティー用の正装を着ていた。

アベルにしてみれば、かなり奮発して買った服だ。

それはエル姉も知っているので、この系統の服を汚すと、それはそれは責められる。

本当に普通に洗濯できないらしくて、使う洗剤やら洗い方やら、すべて特注になるらしい。

高価な服というのは扱いも特殊らしいのだ。

その辺はフィーリアに任せきりだから、アベルは詳しくは知らない。

だが、だからこそ、このことで責められると強く言えないのだ。

フィーリアに迷惑をかけたと責められると言いつ返しなないので。

しかしアベルが思索に耽っているあいだ、少女はふしぎそうに首を傾げていた。

「せんたく？」

意味を知らないと言いたげな声にアベルが振り返る。

少女はそれはふしぎそうな顔をしていた。

（もしかして？）

「洗濯……知らない？」

「あ。いえ。知っています」

「ふうん。知ってるんだ？」

白々と問えば少女は必死になって頷いた。

どつちらこれでごまかせると思っているらしい。

思っていた以上の箱入り娘だ。

これはそうそうに迎えがくるに違いない。

それまで丁重に相手をすればいいかと、アベルはさっそく覚悟を決めた。

こういってお嬢さんの道楽には、まともな相手をしないにかぎる。

でないとおエル姉がキレるし。

第1章 教会と孤児院（2）

教会がみえてきて隣に建っている大きい古ぼけている建物の扉を開ける。

少女もおっかなびっくりついてくる。

「フィーリア。ただいまー」

声を投げるときも、どうしてもか「エル姉、ただいま」とは言えなかった。

いつもなら「エル姉、フィーリア。ただいまー」なのだが、このときばかりはエル姉の名前は出せなかった。

「あつ。おかえりなさい、お兄ちゃんっ!!!」

シスター姿のフィーリアが現れた。

金髪を肩で揃えていて瞳は紫。

傲慢の妹だ。

「ただいま、フィーリア」

頭を撫でるとフィーリアが幸せそうな顔になる。

まだ14歳。

それなのに家事をすべて任せて、おまけにシスター見習いとしての仕事もある。

苦労させてるなとつくづく思う。

「お兄ちゃん、その人、だれ？」

「ああ、うん。レティっていうんだって。行くアテがないとかで、腹を空かせてたから連れてきたんだ。なんかある？」

「んー。お夕飯の残りなら。あ。お兄ちゃん分もちゃんとあるよ？」

「わかってるよ。フィーリアが俺の分を食べるとは思っていないから」

「それからお姉ちゃんがお兄ちゃんに謝っていてほしいって」

「……」

「お姉ちゃん、とても後悔してたよ？ 自分の価値観を押しつけたって。全部お兄ちゃんのお世話になっているくせにでしゃばりだったって。お兄ちゃんが出て行った後で泣きそうな顔してた」

「……そっか」

エル姉はたしかに貴族がきらいで、貴族絡みだと暴走してしまう。

だが、感情で動いても、こうやって反省することのできる女性だ。

だから、アベルは彼女をきらえないのだ。

どれほど苦勞させられていても。

今頃、教会の掃除でもして反省している頃だろう。

後で慰めておこうと心に決める。

そうして控えめに立っている少女の方を振り向いた。

「こつちにおいで。食べさせてあげるから」

「ごめんなさい。ご迷惑でしょう?」

レティがそう言えば、あからさまに怪訝な顔になって、フィーリアがアベルの耳許にささやいた。

「お兄ちゃん。このお姉ちゃん、帰る家がないなんて嘘でしょ？
こんな上品な孤児みたことない」

「ああ。たぶん家出だと思っ。まあ本人が家に帰れないって言うんだ。今は面倒をみておいて迎えがきたら、そのときに考えればいいだろ？ 本人が帰りたいがるかどうかは別として」

「エルお姉ちゃん、怒るよ？ もしこのお姉ちゃんが貴族だったりしたら」

「そうだったとしても、困ってることには違いない。エル姉がそこ

で追い出すのは、シスターとして失格だろ？　そこはフィーリアも説得しろよ。とにかく飯も食えないくらい困ってるのはたしかなんだからさ」

「食べられるだけのお金があって食べないのに困ってると言われても……」

「あいな、フィーリア。貴族って案外、金持っていないものなんだ」

「そうなの？」

きよとんとした顔になるフィーリアにアベルは重々しく頷いた。

「金持ち金持たずっていうのかな。貴族は出歩くときに金を持ち歩かない。つまり家出なんてしても、食べるお金は持ってないってことなんだ」

「それで家出してなんとかなるの？」

「普通なら悪い奴にさらわれて終わり、なんだろうけど、この娘の場合、俺と逢ってるからな。その分、運がよかったってことで」

「お兄ちゃんの貧乏クジを引く損な一面変わってないね」

呆れたように言われて、アベルは慌てて咳払いした。

「とにかくっ。飯だ、飯っ！！」

アベルは大股に歩いて行ってしまっ。

フィーリアはクスクス笑って、呆気に取られているレティの方を振り向いた。

「お兄ちゃん、先に行っちゃったから追いかけてよう？」

「あ。はいっ」

慌てて返事をするレティに世間知らずな一面が覗いて、フィーリアは改めて実感した。

レティの運のよさを。

アベル以外に拾われていたら、今頃どうなっていたか。

その辺をわかっていないらしいので、レティの運のよさも本物だと感じていた。

第1章 教会と孤児院（3）

時刻は深夜。

孤児院の一室に院長兼神父のシドニーとシスター・エル。

そしてシスター見習いのフィーリア。

最後にアベルが集まって頭を悩ませていた。

「どつするの、アベル？」

シスター・エルは不機嫌だ。

明らかに自分たちとは住んでる世界の違う少女をアベルが連れてきたのだ。

おまけにすぐくると思っていた迎えはこなかった。

少女レティは今健やかに眠っていたりする。

一応あの後エルにも紹介して、シドニーの許可ももぎとり、レティはここへの滞在を許された。

しかしそれはだれもがすぐに迎えがくると踏んでのことだった。

全く迎えがこないと言うのは想定外だ。

彼女の身なりこそ、そこそこ上等だが一般の平民と言っても通用するていどだ。

だが、立ち居振舞いというのだろうか。

みせる態度や振る舞いが、どうみても平民のそれではない。

明らかに貴族層、違っても裕福層のものだった。

アベルたちと同レベルではないのは明らかだ。

そんな少女を匿っていたら、最悪、誘拐ととられるかもしれない。

シスター・エルはそれを危惧しているのである。

保護しているだけなのに誘拐したと思われるのではないかと。

「とりあえず本人が身元については話したがらないんだ。今はどうすることも……」

シドニー神父が言いかけたとき、人一倍耳のいいフィーリアが立ち上がった。

「だれかきたみたい。この靴音……マリンお姉ちゃんかな？」

「マリンが？」

アベルとエルの声が重なる。

やがてすぐに控えめなノックの音がした。

「シドニー様はいらっしゃいますか」

そんな挨拶を投げながら入ってきたのは、女だてらに騎士をやっているマリンだった。

この近所が実家でアベルたちとも兄妹同然に育ってきた少女である。

凜々しい立ち姿にエルが嬉しそうに出迎えた。

「久しぶりね、マリン。こっちに戻ってきたのは何年ぶり？」

「お久しぶり、エル姉。さっそくで悪いけど……レティがこなかった？」

「レティって……マリン、知り合いなのか？」

アベルが驚いた声を出すと、マリンがその漆黒の瞳を光らせた。

「アベル。またアンタなの？」

「いや。また俺かと言われても……」

「迷子を見つけたらすぐに騎士団に報告すること。何度言わせたら気が済むのよ？ ここに連れ込むなってっ……！」

「迷子って……レティはどう見ても15は過ぎてるだろ？ 16くらいじゃないのか？」

呆れ顔になるアベルにマリンは強気で言い切った。

「家に帰れなくなってるなら迷子でしようがっ！！」

「そりゃあそうかもしれないけど、飯を食わせるくらいいいじゃないか。本人だつて見知らぬ俺の前で腹を鳴らすほど減ってたんだし」

「ああ。お勞しい」

頭を抱え込むマリんに、どうやら彼女が迎えらしいと悟って、シドニー神父が割り込んだ。

「それでマリンは彼女を迎えにきたのかい？」

「迎えと言いますか……」

「違うのかい？」

「いえ。迎えには違いないのですが、レティが素直に戻られないのではないかと危惧しています」

マリンはシドニーを尊敬しているので、あからさまに態度が違う。

我が身と比べれば多少は不満も出るが、アベルは納得して呟いた。

「まあなあ。彼女は身元に関する事は、一切話さなかったし。明らかに家出って感じだったからな。マリンが迎えにきたところで素

直に帰らないだろうけど」

「アンタねえ」

マリリンが呆れている。

どうやら説得しろと言いたいらしい。

たしかにアベルは子供の世話は慣れているし、職業柄。女性の相手も慣れている。

普通なら説得くらい容易いのだが、なんとなく気が進まなかった。

それはたぶん彼女が見知らぬ世界を一生懸命、知ろうと努力していたからだろう。

レティは知らないこと、わからないことを、わからないままでは終わらせなかった。

わからなくても理解できなくても、必死になって理解しようと、自分でも同じことをしようと努力していた。

でなければとつくに騎士団に報告している。

家出なのははっきりしていたし、罪に問われる可能性も熟知していた。

だから、普通なら届け出ているのだ。

レティが世間を知ろうと、あんなに必死でなければ。

第1章 教会と孤児院（4）

家出したのにもなにか理由があるんだなと、親子喧嘩くらいの理由ではないと知ったから報告する気が失せた。

そのことではエルにもシドニーにも問われていたアベルである。

同じことをマリンに責められても答える言葉がない。

「説得する気がないの？ アンタが説得すれば一発でしょうに」

「マリンが彼女と親しいならわかるはずだ。これは軽い気持ちでの家出か？」

「……………」

「彼女には彼女の考えが意志がある。それを無視して連れ戻そうとするなよ。そりゃ彼女の両親でも出てきたら、俺だって素直に説得するけどさ。親に心配をかけるのは、やっぱりよくないと思うから」

天涯孤独のアベルが言うのと重さのある言葉である。

とっさにマリンも言い返せなかった。

「説得したければ自分でやれよ。俺を頼るな」

「アベル」

「お兄ちゃん。そんな言い方……………」

「俺の目からみて彼女は自分に必要なことをこなしているように見える。だから、俺からは説得したくない。それでも説得したければ自分で説得しろ。他人を頼るんじゃない」

「わかった。もう頼まないからいい」

マリンは唇を噛みしめてそう言った。

「シドニー神父。レティはどこですか？」

「2階の客室で寝ているよ。しかし今から起こすのかい？ 明日にしてあげたら」

「レティのご両親がとても心配されています。連れ戻すのがわたしの役目です。申し訳ありませんが」

それだけ言ってマリンは踵を返した。

それからしばらく経っても、マリンは2階から降りてこなかった。

時折、言い争うような声が聞こえてくる。

それを階下で聞きながら、アベルたちは難しい顔をしている。

案の定レティが帰ることに同意しないらしい、と。

やがて仏頂面のマリンがひとりで階段を降りてきた。

「マリン？」

シドニーが心配そうな声を投げる。

「玉碎しました」

「そう……なのかい？」

「申し訳ありませんが、しばらくレティをお願いします。わたしは彼女のご両親に報告して、なんらかの手を打ちますので」

「それはいいけど彼女……どこの家の令嬢なの？ まさか貴族じゃないでしょうね？」

「お姉ちゃん……」

フィーリアがエルの手を引っ張るが、エルはマリンを睨む眼を外さない。

アベルとシドニーは男同士で顔を見合せた。

「ごめんなさい、エル姉。それについては触れないで」

「マリン……」

エルが複雑な声を出す中、マリンがアベルを振り向く。

「ちょっときて」

「なに?」

「いいからきなさいっ!」

怒鳴られてアベルは孤児院の外まで連行された。

人気がない静かな住宅街。

マリンと向かい合って立ち、アベルは不思議そうな顔をしていた。

「アンタは貴族にも顔がきくでしょうし、隠しても隠せないだろうから、今から教えておくわ」

「彼女の素性について?」

それしかないと思って問うとマリンは苦い顔で頷く。

「アンタが貴族相手に商売してること、わたしは忘れてないわよ」

「だろうな。仕事柄知られるとは思ってた」

「アンタって飄々としてるのに、肝心なところでボケてるというか。それだけ顔が広くてどうして気づかないの?」

「なんの話?」

首を傾げればマリンは絶望的な顔をした。

「レティと聞いて、あの金髪と銀の瞳をみて、どうして気づかない

の？ アンタほど貴族の事情に通じた人が」

「レティ……金髪、銀の瞳？」

呟いてふと思い出す。

噂に聞いていた人の名を。

「まさか……レティシア王女？」

このディアンの王女で姉、レイティアと共に第一王位継承権をもつレティシア。

彼女は第一王女レイティアとは双生児で、従ってその関係で王位継承権も同等。

第二王女だが情勢次第では女王になるかもしれないという立場にいる。

呟けばマリンが苦い顔のまま頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810y/>

千夜一夜

2011年11月10日07時17分発行